ルル 追加 HO C 夕食を食べたあと、私は自室で買ったものを広げていた。 どこで買ったか、ツバメとどんな会話をしたのか、ひとつひとつ覚 えている。

勇気を出して、誘ってよかった。

自覚した恋心がどんどんと膨らんでいくのがわかる。

ついつい彼を目で追ってしまうからこそ、わかることがあった。 薬屋リーファに来た当初よりも、ツバメの笑顔が柔らかくなったこと。

植物に見せる表情に、時折苦しそうな色が含まれていること。ツバメは、なにかを抱えている。

それが一体なんなのか、踏み込んでいいのかが――わからない。

だって私はただの雇い主だ。

彼とは仕事仲間で、それを崩すわけにはいかない。

ここまで築いてきたものがある。

それを壊してしまったら、私が踏み込んだら、彼はここからいなく なってしまうかもしれない。

それは、こわいと思った。

この気持ちを伝えることは――、できない。

フォルとの看病で、彼に頼りきってしまったことが思い起こされる。 私はあのとき、何度も、万能薬のことがよぎった。

でも、ツバメに「フォルと自分の薬を信じよう」と言われて、思いとどまった。

知らず知らずのうちに、ツバメは私を支えてくれているのだ。

そう思えば、また、心の奥に感情が積もっていく。

彼を知りたいと思う気持ちも重なっていく。

でも、私にだって隠していることはあるのだ。

彼が話してくれるまで、待つ――。

私はベッドに横になり、静かに目を閉じた。

翌日。

珍しくツバメ宛てに手紙が届いた。

濃紺色の封筒に金色の封蝋。

とても豪華なそれの差出人は『クロラント』とだけ書かれている。 なぜか心の奥がざわついたけれど、それを抑えてツバメに手紙を渡 した。

彼の表情が少しだけ固くなり、つい、尋ねそうになる。でも、聞いてはいけない気がして、言葉をのみ込んだ。

彼は自室に戻っていく。

あの背中がもう戻ってこなかったら――。

そんなことを考えてしまう自分がこわくて、私は彼の背から視線を そらした。